http://f-env.sakura.ne.jp

☆題字の樹木イラストは、環境の三大要素「水・緑・大気」をイメージ

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会会報
2023年夏号 7月12日(水)発行 通巻89号
発行人　小西 信生（府中市四谷6-19-20）
TEL 080-5646-5524
編集人　葛西 利武
（府中市市民活動センタープラッツ登録団体）

新企画

多摩川名人をめざそう！

小西信生

「田んぼの学校」の後継

今年（2023年度）新企画として、「多摩川名人をめざそう！（以下、多摩川名人）」を始めました。これまでの「田んぼの学校(2面参照)」に代わる環境体験学習です。

「多摩川名人」は多摩川とその周辺での自然観察などを通じて、府中市の豊かな自然に触れ、府中市の自然について学ぶ企画です。4月に募集を始め、5月から来年の2月までの全7回にわたって学習する計画です。

第2回多摩川の自然観察（6月25日）での全員集合写真。
右端は、「多摩川名人をめざそう」の幟

第１回講演会「市民協働で進める自然の保全」

第1回目は、多摩川に最も近い市の施設である、中河原のステーザ中河原4階の男女共同参画センターで、5月21日(日)9:30～12:00まで行われました。

テーマは「市民協働で進める自然の保全」。講師は東京農工大学助教の平原俊博士です。お話しのなかでは、「市民協働で進める」が特に印象に残りました。

具体的事例としては⑴コモンズ、⑵府中市下堰（ｼﾓｾﾞｷ）緑地のことを上げられました。

⑴コモンズとは直訳すると入会（いりあい）になりますが、入会は入会権などとして「特定の団体・集団の、特定の公有地に対する利用・管理する権利」なのに対して、コモンズは「必ずしも特定されない公有地または無主の土地について、不特定多数の使用または利用について」論じるときに使われます。

⑵府中市下堰緑地の事例が説明されたのは、府中市所管の8,000㎡程度の緑地（公有地）に、30人ほどの近隣住民がその保全管理のために自主的に参加して活動している身近な事例として紹介いただいたものです。

下堰緑地の保全は、府中市ではインフラボランティア制度（府中まちなかきらら）として位置付けられる活動ですが、ローカルコモンズの一種とも言えるでしょう。

第2回「多摩川の自然観察」

多摩川関戸橋隣の河川敷の現在は休止している野球場とその周辺で、6月25日(日)9:30～12:00多摩川の自然観察を行ないました。幸い、天候は曇りで、気温も30℃に届かない微風下で行なうことができました。集合は京王線中河原駅前に9:30、現地まで歩いて5～6分です。

観察対象は主に野草と昆虫、東京都では絶滅危惧種（VU）とされている野草のカワラサイコを始め幾つかの野草を確認できました。昆虫も定番のシオカラトンボ、ショウリョウバッタ、イナゴ、コオロギ、モンシロチョウ等の昆虫を確認。

キリギリス㊧、ベニシジミ㊨ともに佐藤智恵子さん撮影

さすがに日陰のない暑い中での自然観察でしたので、11:30頃には観察は終え、まとめは帰路途中の木陰が多い中河原公園で行ないました。また、5月27日の第50回多摩川清掃市民運動の後ではありましたが、河川敷内で草刈りが行なわれた後でしたので、我々は目立ったゴミを拾って帰途につきました。

第3回以降の「多摩川名人をめざそう」

府中市の広報ふちゅう、メール配信サービス、当会内部のメール、口コミにより、第2回では、16人の一般参加がありました。

今後（第3回以降）の開催スケジュールは左表のとおりです。事前予約は必要ですが単発でも応募できます。関心のある市民はお問い合わせください。

日　時	学 習 内 容
③ 8月26日(土) 午後6時～8時	多摩川自然観察「虫の音」鑑賞会
④ 11月3日(金)(祝)午前9時半～12時	旧堤防・旧国鉄下河原線など自然・歴史遺産めぐり
⑤ 12月10日(日) 午前9時半～12時	関戸橋周辺の自然の変遷について
⑥ 1月21日(日) 午前9時半～12時	多摩川自然観察「バードウォチング」
⑦ 2月18日(日) 午前9時半～12時	多摩川がつくった大地・風景　修了式

【連絡先】府中かんきょう市民の会　小西宛
Tel　080-5646-5524　Mail　nobconi@may.email.jp

米づくり体験

府中「田んぼの学校」を閉校

竹内 章
元理事長
現相談役

「田んぼの学校」開催の経緯

2005(平成17)年に第1回目を開催してから、2022(令和4)年の第15回目を開催して、これを最後に「府中田んぼの学校」を閉校する事になりました。この間、様々な思い出があり、過去を振り返って見たいと思います。(途中新型コロナ等により3年間開催を見送りました)

☆

最初に、「田んぼの学校」を開催する事になった経緯は、東京農工大学と府中かんきょう市民の会の共催で「水に親しむ環境づくり」をテーマにシンポジュウムを開催し、「ふるさと景観の保全と創出に関する市民提案」を府中市長宛に行い、体験型環境学習として「農業体験と生き物観察～田んぼの学校」を開校いたしました。

当時の東京農工大学農学部水資源計画学研究室の千賀祐太郎教授とはシンポジュウムで面識があったため東京農工大学農学部の本町農場(フィールドサイエンスセンターFM本町)をお借りして、府中市からは環境学習の委託事業として府中かんきょう市民の会が引き受けることとなりました。

その後、この事業は2016年3月に府中市と東京農工大学との相互友好協定を締結し、この協定に基づく事業に指定されました。

15年間続けた「田んぼの学校」思い出ばなし　”2話”

その1／府中市主催の「市民協働まつり」で、当会のブースに活動紹介のパネルを展示していた折、田んぼの学校のパネルを見つめている男性がおり、話しかけると一枚の写真を指差して”これは私の息子です”と話してくれました。当時小学校3年生だった息子が今は高校生との事です。懐かしそうに見つめていた父親の顔が大変印象的でした。考えて見れば、2005年の第1回目の田んぼの学校で小学校6年生だった生徒は、2023年の今年は満30歳になります。誠に歳月の経過を感じます。

その2／田んぼの学校に親子で参加した母親が、こんな話をしてくれました。我が家では、今まで朝食は主にパン食でしたが、米づくり体験をした後はご飯を炊いて食べる事にしています。子供もお米の大切さを理解したのか、ご飯を一粒も残さず食べるようになりました。田んぼの学校は、本当に良い事を私達に教えてくれました。

この話を聞いて、田んぼの学校に参加された子供達が、米づくりの大変さを実感し、お米を大切にする心を養っていただける機会になったのであれば、大変有難く、主催者側として大変やり甲斐を感じます。

☆

2005年の第1回から2022年の第15回まで続けてきた田んぼの学校は、当会の会員の高齢化によるスタッフ不足等の諸事情により、第15回を以て閉校する事になりました。

これまでに参加した累計参加者(生徒、保護者、スタッフ他)の総数は6241人となります。参加者からは大変多くの感想や感謝の言葉を頂き、主催者側として感慨無量の一言に尽きます。

15年間、ありがとうございました!!

①開校日に全員集合記念撮影 ②東京農工大生によるピヨピヨ体操(柔軟体操) ③田植え ④稲刈り・ハサ掛け ⑤脱穀・モミすり ⑥収穫祭・修了式(中央は竹内氏)

剪定・整枝講習会

アッという間の、2時間！

山原 充

3月29日㈬の9時～11時…昨夕までの雨が上がるもまだ寒かったこの日、樹木の剪定を実習した。ハケ下から五小方面へ向かうエレベーター近く、1回目を実施してからちょうど1年になる。しばらくして日がさし始め暖かくなり、遊歩道を挟む満開のサクラも一層映えてきた。

講師は市が委託している園芸業者「第一造園(株)」から8人、参加者は当会会員6名と、多摩川沿いにある用水路跡の保全活動に携わる「下堰緑地の会」から1名の計15人。

講師の指導により、スッキリ2例

まずは基本であり、昨年剪定実習したツバキ3本とサザンカ1本を対象。この4本は丸くもじゃもじゃしていた。

㊤左側ツバキ、右側サザンカ
㊥と㊨はツバキ。剪定後、それぞれスッキリ

その後、数年手入れされず、かなり複雑になっている別の一本のツバキを選び、複数人が分担して自学習した。そしてツバキもこのようにスマートになり、息苦しさから解放された…。このスマート感、スッキリ感は以下の①～⑥によるものだ。

㊧ツバキ㊥複数人での剪定作業
㊨風通しがよくなり、スッキリしたツバキ

①植生管理には樹木の骨格をイメージ

今の樹形が丸く形がよくてシルエットもよい、という視点でなく、生長後の姿を思い描く。これなしに手を加えれば枝のバランスが悪くなり、樹形や見栄えは崩れる。

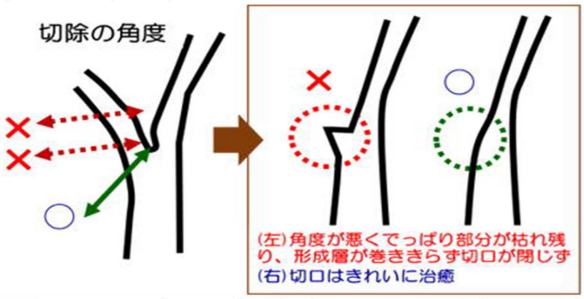
②イメージに合わないものは切除

切除すべきものは「主枝から空に勢いよく伸び新しい枝」「伸長方向に平行している数本の枝」「他の枝に絡んでいるもの」「イメージ方向の上下に伸長し枝の混み具合を増しているもの」などである。ただし放置されているものは段階的にだ！

③樹形づくりには細い枝も重要

イメージに合う2本の枝が密着している場合は、細いほうを残す。太い枝は生長の証しで木の骨格を作る、という感覚であったが、栄養が偏るとのこと。傍らで寄り添う発展途上の若手に全体最適を委ねる、ということだろうか。

④不要な枝は枝元を残さず巻くように切る



左図は第一造園より配布された資料を編集したもの

木にダメージを与えないという思いから枝元を少しでも残して切ると、切り口が塞がらず、幹焼け＝人間でいえば熱中症などを起こす。動物の体の手術も、きれいにしないとなかなか治癒しないし、バイ菌がつきやすいのと同じ。

⑤太目の枝の切口は消毒せよ

切除した太目の切口には、業者が用意した液を塗布した。黄色っぽく、少しネバネバ感があった。水分や栄養の流出防止、免疫のない樹木の切り口(キズ)の保護、とのこと。

⑥「剪定ばさみ」は有用

受講者の多くは、使い慣れている「刈込ばさみ」でトライしたが、すぐに業者の方が腰に下げていた「剪定ばさみ」を貸してくれた。使い勝手が大変よかった。

効率的だがザックリ感のある刈込に対し、斜め切りや円形切りなどの自由性、その切り口は滑らかで弾力があり、出来上がりには手作り感があった。

「市民協働」が一層すすむ

あっという間の2時間の実習だったが、はじめての人も多く「まずは、ごちゃごちゃ感のある自宅の庭をきれいにしてみたい」とは女性会員の帰り際の弁。

剪定した樹木は、生長するために萌芽し緑分を増やす。当然不要な枝も多い。スッキリ感を得た5本の低木であるが、どんな方向に形づけられていくのか、手塩にかけた子供たちの成長を見るのと同じ。

これまでの行政主導の緑地管理は、高木剪定や広範囲での下草刈りが中心であったとの由。今回の低木を対象とした剪定実習は2回目であるが、本会員をはじめとする住民ボランティアが参加していることで、自生植物の多い緑地や河川での植生管理や景観づくりに向けた「市民協働」の量と質が一層進むことであろう。

新規事業の報告あり

令和5年度総会、開催される

吉武考三郎

令和5(2023)年度の総会が、4月12日㈬14:30～15:30まで、男女共学センター「フチュール」にて開催された。

小倉紀雄先生の特別講演

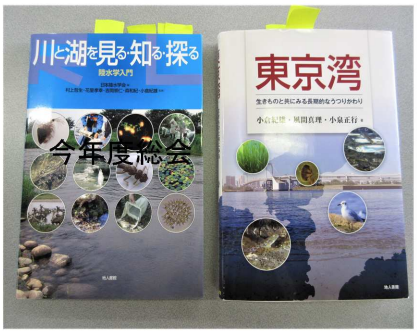
今回は総会に先立ち、当会顧問である小倉紀雄東京農工大学名誉教授による「多摩川－その自然と文化」と題する特別講演が1時間ほど催された。小倉先生は「身近な水環境の全国一斉調査」の音頭を取っている「全国水環境マップ実行委員会」の委員長を2021年まで長年にわたって務められ、また多摩川や東京湾に関する著書も多数執筆されるなど、水環境学の第一人者である。

今回の講演では、万葉集に現れた玉川(多摩川)の話から浮世絵の中の玉川、そして筏流しや鵜飼・鮎漁の様子など多摩川の歴史と文化をスライドでたどりながら、これからの多摩川保全のあり方などを語っていただいた。「多摩川と私たちが共生できるように、自然を利用しながら保全することが重要な課題」との先生のお言葉には、出席者も大いに納得できた。

講演の様子(小倉先生スクリーン左)

今年度総会

総会は新型コロナ感染症も落ち着いてきたことから、リアル開催とした。出席者16名、委任状提出者19名で、議決権行使者は35名となり、正会員46名の半数を超え総会は成立、審議に入った。主な議題は以下のとおりである。



小倉先生の著作物2冊

⑴令和4年度事業報告と決算報告
⑵令和5年度事業計画と予算

今回は役員改選期ではないことから、小西理事長以下の役員は変更なしである。まず、昨年度の活動実績および決算の報告があった。コロナ禍で一昨年度までは、特に屋外での活動について大部分自粛せざるを得なかったが、昨年度は「田んぼの学校」「西府崖線保全活動」「環境学習」「公園清掃」「援農ボランティア」「農園塾」などの屋外活動も、所定のコロナ対策を講じつつ、参加者人数を絞るなどの工夫を重ねたことで、ほぼ実施できたことが報告された。ただ、3年ぶりに開催した「田んぼの学校」については、農工大農地の継続使用問題、当会従事者の高齢化など、懸案事項も顕在化してきたことから、計15回の開催実績を節目として令和4年度をもって終了することとなった。

総会での小西理事長挨拶(スクリーン左)

また、定例会、事務局会議については、リアル会議とウェブ会議との併用とし、直接の接触をなるべく避ける方式を採ったこととが報告された。

決算については、収入約73万円(内、会費8.9万円)、支出約69万円で次期繰越金が約110万円となったことが報告され、会計監査報告の後、承認を得た。

☆新規事業の「多摩川名人をめざそう！」
☆農園塾から「子ども食堂」への野菜収穫物の無償提供など

次に今年度の活動計画および予算について説明があり、承認された。今年度の会の全般活動としては、新型コロナ感染症の状況や、国の対処方針を注視しながら、基本的にはほぼ通常の活動に戻すことが説明された。活動内容の主なポイントは、昨年度で終了となった「田んぼの学校」に代わる環境体験学習として「多摩川名人をめざそう！」との新規事業の企画案が紹介されたことである。5月から来年2月まで計7回にわたり、屋外観察会(多摩川河畔)や屋内での講義を予定している。

また、当会として地域貢献活動に資するべく、農園塾での野菜収穫物を市内の子ども食堂に無償提供することを検討していくこととなった。

予算案は、収入約71万円、支出約76万円の予定である。主な支出項目として、「公園清掃」の中で押立緑地に掃除用具収納庫の設置のため予算措置(約4万円)を講ずることが説明された。

4月1日現在の会員数は、計66名となっており、正会員46名、賛助会員20名である。会費については前年度と変更なく、正会員1,500円、賛助会員1,000円で、いずれもボランティア保険込みとなっている。

府中かんきょう塾 2023
開講式

講座「環境活動をのぞいて見よう！」

葛西利武

下記要領で「府中かんきょう塾2023」の開講式が行われた。主題は、「環境活動をのぞいてみよう！」である。参加者総数は20人ほど。

日時／5月20日(土)　午後1時～3時
会場／府中駅北庁舎3階　会議室
講師／東京農工大学教授　朝岡幸彦氏
＜以下は、環境活動報告順＞
協力／①NPO法人 府中かんきょう市民の会
小西信生理事長
※1999年設立。2004年「NPO法人格取得」
②浅間山自然保護会（1982年設立）
山田義夫会長　※浅間山は標高79.6m
③かんきょう塾ネット（2006年設立）
三宅昭代表
主催／府中市（環境政策課 環境保全活動センター）

朝岡幸彦先生は大学の授業でも、90分立ったままで話すとのこと

開講式、講座

講師の朝岡幸彦氏が上記協力3団体のことに触れた後、SDGs（持続可能な開発目標）と「ポストコロナ社会におけるSDGsと環境教育」について、お話しされた(上写真)。

その概要は以下である。

大きな厄災は急激な社会の変化をもたらす。新型コロナウイルス感染症パンデミックも歴史的な厄災の一つである。2019年12月1日以降を「AC（アフター・コロナ）時代」と呼べば、AC4年の現在は「ウィズ・コロナ」の時代である。

新型コロナによって、世界に不可逆的な変化がもたらされ、我々は新しい生活様式に慣れ始めた。そうした大きな変化のひとつが「環境への配慮」であろう。

世界の著名人たちは次のように述べている。パオロ・ジョルダーノ（イタリア）は、「自然と環境に対する人間の危うい接し方、森林破壊、僕らの軽率な消費行動にこそある」と

小西信生氏が、「NPO法人府中かんきょう市民の会」の活動事例報告（中央）

した。マルクス・ガブリエル（ドイツ）は、「私はこれまでよりも遥かに環境に配慮するようになりました」、と。ジャレド・ダイアモンド（アメリカ）は、「気候変動や資源枯渇といった問題も続けて解決するチャンスとなるはずだ」という。

俗にいえば、「ピンチは変革へのチャンス」であるということだろう。ちなみに、筆者もコロナ前に比べて「かけがえのない地球」に、より関心が強くなった。

3団体の活動事例報告

つぎに、3団体の活動を通しての「環境活動とはなにか？」の活動事例報告であるが、紙幅に制限があるため、ここでは当会だけの紹介とする（上写真）。

小西氏は映像を使い、公園清掃、市民花壇、援農ボランティア、緑地保全、環境学習、府中町農園塾、生態系調査、大気調査、水量・水質調査など様々な活動事例をあげた。現在の会員は71人。その後、参加者との質疑応答があった。

なお、当会会員の「府中かんきょう塾」卒業生はトータル二桁に及ぶだろう。ちなみに、筆者は2012年の卒業生である。

「府中かんきょう塾2023」の講座案内

回	日　時	内　容	講　師
1	5月20日(土) 午後1時～3時	開講式、 講座「環境活動をのぞいてみよう」	東京農工大学 教授　朝岡　幸彦 氏
2	6月10日(土) 午前10時～正午	環境学習見学「植物多様性センター」 ※調布市神代植物公園内　※要交通費等	施設担当者
3	7月8日(土) 午前9時半～正午	自然調査体験「多摩川の植物調査」 ※郷土の森博物館入園料が必要	東京農工大学 名誉教授　藤井　晴義 氏
4	9月13日(水) 午時9時～午後4時	自然観察「埼玉県自然学習センター」 ※北本自然観察公園内　※市バス使用	施設担当者
5	10月中旬(土) 午後1時～3時	講座　※調整中	市内　※調整中
6	11月18日(土) 午後1時～3時	講座　「諸外国の環境教育活動の紹介」 (予定)	JICA元隊員　※調整中
7	12月後半(土) 午後1時～3時半	講座　「ボランティア活動の基本とリーダーの役割」 閉講式	市民活動センタープラッツ 館長　林 丈雄 氏

3年ぶり開催！

「府中環境まつり2023」に参加して

浅田多津子

当会ブースに300人来場

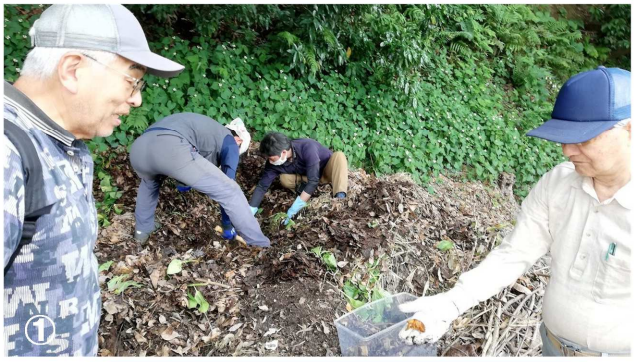
台風の影響で6月4日(日)10時～15時に順延となった。コロナウイルスが5類に移行し、3年ぶりに府中公園での開催である。当会のブースは午前190名、午後110名の300名ほど(子ども含む)が来場し大盛況となった。

環境まつりの参加目的は、老若男女問わず広く市民に環境について考えるきっかけを持って頂くこと。日頃の活動を紹介するパネル展示等からより多くの方々に当会を知って頂き、さらにネットワークを広げるためだ。

バイオネストの生き物たち

今回のメインテーマ「バイオネスト(腐葉土プール)の生き物たち」展示。保全活動をしている西府崖線に設置しているバイオネストからカブトムシの蛹(♀♂)や成虫(♂)、カミキリムシ、ミミズ、ダンゴムシなどの生き物を採取し、層状になっている腐葉土と共に当日展示した。

バイオネストのミニ模型では腐葉土化の自然循環について説明する。カブトムシの成虫はまだ外気温が低いせいかすぐに腐葉土の中に潜り込んでいく。その様子を観る子ども達から「あっ！カブトムシだ。家でも飼っているよ！」「蛹は初めて見た。」などの声が上がる。



①

㊟腐葉土の中の蛹はとても弱い生き物です。掘り起こして、触ったりすることはやめましょう！

大にぎわいの「シュロバッタづくり」

シュロの熊手型葉から作る青色バッタは、今回も人気だ。3年ぶりに会場開催となった今回は初めての来場者が多かったのか「ワア、見てぇ！すご～い！」と感嘆の声が幾度か上がり、これまでで一番の反響あり。地球温暖化で亜熱帯化が進む中、シュロ種の越冬が進み、至る所で成長しているのを見かける。

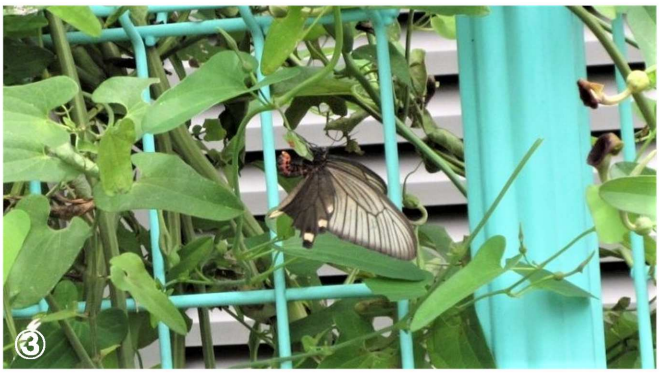
崖線でも在来種を跳ねのけるようにシュロばかりが生息している場所がある。当会では生物多様性を進めるためにできるだけ切ることを要望しているが、幹芯が固く、シュロ皮が器具に巻き付くなどで造園業者泣かせのシュロだ。しかし、大きな緑葉はここでは大活躍となった。

②

ウマノスズクサとジャコウアゲハ

河川敷や崖線、農地で見られてきたウマノスズクサは今や絶滅危惧種に指定されている。そのためこの植物しか食べないジャコウアゲハも減少しているようだ。

当会では昨年度からプロジェクトを立ち上げウマノスズクサを増やす活動を進めている。実物で説明すると、「自分のところでも育ててみたい」と連絡先を教えてくれる場面もあった。



③

第五小3年生の昆虫学習に提供

展示した蛹と成虫はその後、第五小3年生の昆虫学習に役立ていただくため提供した。

よりよい環境づくりとは、その場にある自然(落ち葉など)はその場で循環を進めることで生き物などのよりよい保全につながること。自然に生息している植物はそれを必要とする昆虫などの生息につながること、その意味を少しでも伝えられたことは大変有意義であったと思う。

④

写真／①バイオネストを掘り起こし、手にしているのはカブトムシの蛹 ②当会ブースでのシュロバッタづくりとバッタの拡大 ③ジャコウアゲハとウマノスズクサ(日新町一丁目花壇) ④ハケでの第五小環境学習(野草)

夏の昆虫観察会のお知らせ

○日時　7月22日(土) 9:00～11:00(小雨中止、翌23日順延)
○内容　ハケでの昆虫観察、昆虫生態系調査etc
○協力　東京農工大学 昆虫研究会(3人参加予定)
○集合　西府町緑地 9:00集合(西府文化センター隣り)
○募集　先着10人ほど(中学生以下は親子同伴)
○費用　参加費100円(1人)
○服装　長袖、長ズボン、帽子、飲み物等持参
○担当　浅田多津子
・アドレス　tazuko.a.arigato@gmail.com
・緊急時　TEL090-8806-8165
※詳細は「ハケ・用水・わき水通信(No.47／7月5日)」参照